

白鹿書院本『正字通』聲韻調の分析

古 屋 昭 弘

1. はじめに

本稿では前稿(2004)に引き続き、古屋1992以来、懸案となっていた『正字通』(刊行は康熙十年、1671年)の反切下字の分析の結果を含め、聲韻調全體について考えてみたい。陳昌儀1991『贛方言概要』により常用字の現代宜春方言音も参照する。これは単に張自烈の本籍が江西省袁州府宜春だからというだけでなく、言語形成期を含め張自烈が最も長く暮らしたのが宜春であることを考證したうえでの判断である(古屋1994b/1996)。もちろん現代宜春方音がそのまま明末清初の宜春方音に相當するわけではない。通時的な音韻變化および現代宜春方言自體の内部差異の問題がある。なによりも『正字通』に反映しているのが口語音そのものではありえず、口語音の體系の上に形成された一種の讀書音であることを念頭に置く必要がある。

古屋2002では主に清畏堂本『正字通』の音注に基づいた同音字表を公開、林慶勳2003では主に弘文書院本の音注に基づいた音節表を掲載している。前稿で論じたとおり内閣文庫藏白鹿書院本『正字通』には、後の如何なる版本とも異なる最初期の音注が見える。本稿では、古屋1992と内容上重複するところもあるが、張自烈の本來の姿に近いと推定されるその白鹿書院本¹⁾の音注に基づき、聲類・韻類・調類についての考察を進めたいと思う。

2. 音注

『正字通』の反切は張自烈が自らの字音を基準にして明萬曆年間の『字彙』の反切を徹底的に改造したものである。『字彙』の反切自體は『洪武正韻』の反切を基盤として、その中に編者梅膺祚の安徽吳語の字音の影響が少し見られ

るもの。このことを示すため以下『洪武正韻』『字彙』²⁾『正字通』の反切を、ほぼすべての類型が見られる人偏の最初の 20 数字について、較べてみたい：

	洪武	字彙	正字通
①	什 寔執切	寔執切	世執切
②	仿 歷德切	歷德切	盧白切
③	仆 芳故切	芳故切	符遇切
④	叭 ——	布拔切	布衲切
⑤	仔 祖似切	祖似切	祖此切
⑥	仞 而振切	而震切	如禁切
⑦	以 養里切	羊里切	隱起切

以上のうち①では禪母「寔」が書母「世」に、②では曾攝「德」が梗攝「白」に、③では敷母「芳」が奉母「符」に、④では山攝「拔」が咸攝「衲」に、⑤では止攝全濁上聲の「似」が次清「此」に、⑥では臻攝「仞」の『洪武正韻』『字彙』二書の反切下字「振震」（臻攝）が『正字通』では深攝「禁」に、⑦では以母の「養羊」が影母「隱」に、それぞれ換えられている。②⑥と④は『正字通』における臻深梗曾四攝合併と山咸二攝合併、①③⑦は聲母における清濁の區別（喻母・影母の區別を含む）の消失、⑤は全濁上聲字の去聲化の、それぞれ現れである。

	洪武	字彙	正字通
⑧	今 居吟切	居吟切	居欣切
⑨	他 湯何切	湯何切	湯戈切
⑩	仙 蘇前切	蘇前切	蘇焉切
⑪	佷 虛延切	虛延切	虛焉切
⑫	仨 胡公切	戶工切	湖同切

これらの例では『洪武正韻』『字彙』二書の反切上字「吟何前延」が、『正字通』としては陽平調になってしまうため陰平調の「欣戈焉焉³⁾」に、「公（工）」が、『正字通』としては陰平調になってしまうため陽平調の「同」に、それぞれ換えたことがわかる。次のように元のままで問題ない時はわざわざ用字を換えることはしない。

	洪武	字彙	正字通
--	----	----	-----

- ⑬仇 渠尤切 渠尤切 渠尤切（「仇尤」ともに陽平調）
 ⑭仟 倉先切 倉先切 倉先切（「仟先」ともに陰平調）
 ⑮仇 —— 止兩切 止兩切（上聲の例）
 ⑯代 度耐切 度奈切 度奈切（去聲の例）
 ⑰介 居拜切 居拜切 居拜切（去聲の例）
 ⑱仗 呈兩切 呈兩切 直亮切
 直亮切 又直亮切 又養韻（去聲優先の例）

逆から言えば、『正字通』の反切が『字彙』と同じ字面であっても、それは張自烈が自分の字音に適合すると判断した上での継承であり、徹底的に改造された反切と同等にみなして構わないと判断される。

	洪武	字彙	正字通
⑲人仁	而鄰切	而鄰切	如神切
⑳參	止忍切	止忍切	章引切
㉑仕	時吏切	時吏切	時至切

これらの例では、なぜ『正字通』で用字変更の必要性があったのかややわかりにくい⁴⁾。

	洪武	字彙	正字通
㉒仍	如陵切	時征切	如神切
㉓令	力正切	力正切	力恨切

㉒では『洪武正韻』が中古音のまま正しく曾攝三等日母の音を示しているのに対し、『字彙』では上字を禪母「時」、下字を梗攝「征」に換えている。これは『字彙』の編者梅膺祚の安徽吳語の字音の影響と考えられる（古屋 1998）。一方『正字通』は下字を臻攝「神」としている。㉓では反対に、反切下字が、伝統的には正しい梗攝三等「正」から『正字通』では臻攝一等「恨」に換えられている（白鹿東大本以降は「力正切」に戻される）。

	洪武	字彙	正字通
㉔尙	——	符約切	職略切

この例は『字彙』の字音自體を『正字通』で他の音に換えたものである。

以上と関連するが、たとえ見た目は似たような音注であっても『正字通』と『字彙』では表す音の違う場合がありうる。たとえば、中古音であれば同音であるはずの『字彙』「千羊切」と『正字通』「七羊切」の場合（千と七は中古清

母)、前者は中古音どおり清母の「槍」の音を表すのに對し、後者は從母の「牆」を表す。『正字通』では「槍」の反切は「七裏切」である⁵⁾。

また「杖」の直音注「長上聲」の場合、『字彙』では反切「呈兩切」のとおり中古澄母上聲の音を表すと言えるが(杖長呈ともに澄母)、『正字通』では反切が次清昌母「廠」と同じ「齒兩切」(齒は昌母)となっている。つまり「長上聲」は中古昌母上聲相當の音を表すのである⁶⁾。「伴」の直音注「盤上聲」の場合も同様である。『字彙』では反切「蒲滿切」のとおり中古並母上聲の音を表すと言えるが(伴盤蒲ともに並母)、『正字通』では反切が次清滂母「普」を使った「普滿切」となっている。つまり「盤上聲」は中古滂母上聲相當の音を表すのである

聲母と韻母の組み合わせに関連する問題もある。唇音聲母のもとで韻母の開合が曖昧になるのは中古音以來の反切の特徴である。たとえば、

莫侃切=莫管切(下字「侃」は山攝一等開口、「管」は山攝一等合口)

「解」佳買切≠「拐」古買切(下字は同じく「買」だが、「解」は開口、「拐」は合口)

このほか『正字通』では韻母の直拗(介音 -i- を持つものが拗音、介音ゼロが直音)の區別が曖昧になる聲母がある。非母系と莊母系である。たとえば、

非母系: 符遇切=符素切(「遇」は拗音 *iu、「素」は直音 *su)

莊母系: 側鳩切=側鉤切(「鳩」は拗音 *kiəu、「鉤」は直音 *kəu)

初覲切=初良切(「覲」は拗音 *kin、「良」は直音 *kən)⁷⁾

非母系は唇齒音 [f] と莊母系は舌葉音 [tʃ tʃʰ ʃ] と再構され、これらの子音のあとでは介音 [-i-] の有無が中立的になると考えられる。特に後者は音聲學的にも理解しやすいものと言えよう。以下の議論でも、これらの聲母については韻母の直拗に關して中立的と考えて再構を進めたい。

3. 反切系聯法の問題點

本稿では韻母の分析に當たって、聲母の場合と同様、主に反切系聯法を使うことになるが、韻書の反切を系聯するのと違って、字書の反切の系聯には様々な困難が伴う。韻書では、少なくとも、ある韻目の中の諸反切の主母音・韻

尾・聲調が等しいことは自明の理である。ところが部首引きの字書では、主母音・韻尾・聲調が等しいものが各部首に分散してしまう。原則として一つの音節に一つの反切が對應する韻書と異なり、字書では同じ字音と推定されるものに複数の反切が對應することもしばしばである。『正字通』の場合、一つの音節に複数の反切が存在する状況は相對的に少ないと言えるが、それでも一つの音節（と推定されるもの）に四つ以上の反切が對應することもある。また、これだけの大型字書であってみれば、稀に『字彙』の反切をそのまま援用した結果、自らの反切作成の原則と一致しない例が出てくることもやむをえないところである。たとえば上述のとおり平聲の陰陽を反切下字で示す通則があり、たとえば陰平調を表すと推定される「晡」の反切が「奔孤切音逋」であるのは、下字「孤」も陰平調と推定されるため通則に合致する。ところが同音と思われる「逋」の反切は「奔模切」であり、下字「模」（莫胡切）は陽平調と推定される。これは『字彙』の反切「奔謨切」とほぼ一致する（「謨」は「模」と同音）。こうなると反切系聯法はお手上げである。陰平調の「孤」と陽平調の「模」が系聯されてしまうからである。本稿ではこのような場合、すなわち『正字通』の通則と一致せず『字彙』と字面が一致する反切があった場合、主觀的な扱いになる恐れがあるとはいえ、考察からはずすことにしたいと思う。

次に同じ韻類と推定されながら系聯できない場合が問題となる。たとえば假攝二等開口の上聲の反切をすべて列挙すれば「補瓦、莫雅、丁雅、側賈、丑雅、初瓦、沙雅、沙瓦、舉雅、苦雅、許雅、閒雅、擬把、以把」となる。下字を系聯しようとしても、どうしても①把（補瓦）－瓦（五寡）と②賈（又音假、假：舉雅）－雅（牙上聲）の二系列に分かれてしまう。このような場合、「沙瓦切沙上聲」と「沙雅切沙上聲」という二つの音注により①と②を繋げるしかないであろう。

他に反切の構造上の問題として、『正字通』には上字が拗音（介音 [-i-]）、下字が直音、歸字が拗音という反切が見られる。中古音の反切にも稀に見られるタイプである。たとえば、

以紅切→容 *i + huəŋ → iəŋ または iuəŋ

力恨切→吝 *liʔ + hən → lin/liən/

これも中古音の反切にも稀に見られるタイプながら、上字が合口、下字が開

口、歸字が合口という反切が『正字通』にも見られる。たとえば、

戸牙切→華 *hu + ŋa → hua (牙：牛霞切)

乎才切→懷 *hu + ts^hai → huai (才：猜來切)

これらの場合も反切系聯法はお手上げとなるので、「恠、力正切音咨」（「正」は『正字通』では拗音 *tʃin）、「華、戸牙切話平聲」（「話」は『正字通』では合口 *hua）、「壞、火怪切懷去聲」（「壞」は『正字通』では合口 *huai）のような音注を傍證とするしかない。

4. 聲調相配の問題

反切系聯法により幾つかの反切下字が繋がったとしても、陰平聲・陽平聲・上聲・去聲・入聲など、それぞれの聲調同士が相配するかどうかは別問題である。本稿では、完全な方法とは言えないが、聲調を使った直音注に頼りたいと思う。たとえば假攝二等開口の陰平調「鰕」（虚加切）を基準にすれば、上聲の「許雅切鰕上聲」、去聲の「呼嫁切鰕去聲」を相配させることができる。ただしこの方法には弱点がある。張自烈は反切下字において陰平調と陽平調をはっきりと分けておきながら、聲調を使った直音注においては陰平調と陽平調の區別を曖昧にしているのである。たとえば陰平調「拋」の音注は「（鋪高切）砲平聲」、陽平調「庖」の音注も「（蒲豪切）砲平聲」であり、また陰平調「掇」の音注は「（倉刀切）草平聲」、陽平調「曹」の音注も「（才豪切）草平聲」である。このような限界があることを踏まえたうえで、あとは中古音との對應や現代宜春方音を参考にしたいと思う。

このほか入聲字の直音注の中に陰聲字を使ったもの、或いは陰聲字の直音注の中に入聲字を使ったものが稀にあり、韻類の具體的音價を決定する際、一定の役割を果たすことが期待される（括弧の中は『字彙』の音注）⁸⁾：

諾	尼各切那入聲（囊入聲）	諾 *noʔ	那 no
僻	披席切批入聲（聘入聲）	僻 *pʰiʔ	批 pʰi
僣	尼篤切努入聲（農入聲）	僣 *nuʔ	努 nu
橘	厥律切居入聲（鈞入聲）	橘 *kiuʔ	居 kiu
合	侯閣切呵入聲（含入聲）	合 *hoʔ	呵 ho

參	丁奢切 <u>妲</u> 平聲（音低）	參 *ta (*tia?)	妲 taʔ
打	丁雅切 <u>達</u> 上聲（音一）	打 *ta	達 tʰaʔ
茶	鋤麻切 <u>插</u> 平聲（蜡平聲）	茶 *tʰa	插 tʃʰaʔ
阿	烏戈切 <u>惡</u> 平聲（音窩）	阿 *o	惡 oʔ
骨	古忽切 <u>古</u> 入聲（昆入聲）	骨 *kuʔ	古 ku

5. 反切系聯法の例

以上の議論を踏まえたうえで反切系聯法の例を二つずつ挙げてみたい⁹⁾。現代宜春方言は資料に見られるもののみ。

反切上字の例：

「補博」類 *p-

丙（比井）－比彼（補米）－兵（補京）－必（補密）－奔（補昆）－逋（奔模）－補（博古）－布（博故）－博（伯各）－邦（博康）－伯（布格）－北（布格）－悲卑（布非）－邊（悲堅）－謗（布項）

中古音：幫母

現代宜春：丙 p²¹ 比 pi²¹ 彼 pi²¹ 兵 pin³⁴ 必 pi²⁵ 奔 pin³⁴ 補 pu²¹ 布 pu³³ 邦 po³⁴
博 po²⁵ 伯 pE²⁵ 北 pE²⁵ 悲 pi³⁴ 卑 pʰi³⁴ 邊 piEn³⁴ 謗 po³³

「他徒」類 *tʰ-

大（度耐）－度（土故）－土吐杜（他魯）－蕩（杜浪）－天（他牽）－梯（天低）－他（湯戈）－湯（他光）－台（湯該）－唐堂（台郎）－亭（唐寅）－田（亭年）－徒（通吾）－通（徒工）－同（徒紅）－達（徒滑）

中古音：透母、定母

現代宜春：大 tʰai²¹³ 度 tʰu²¹³ 土 tʰu²¹ 吐 tʰu²¹ 杜 tʰu²¹³ 蕩 tʰoŋ²¹³ 天 tʰien³⁴ 梯 tʰi³⁴
湯 tʰoŋ³⁴ 唐 tʰoŋ³³ 堂 tʰoŋ³³ 亭 tʰin³³ 田 tʰien³³ 徒 tʰu³³ 通 tʰəŋ³⁴ 同 tʰəŋ³³ 達 tʰa²⁵

反切下字の例：

*-iu

陰平：須胥（相居）－居（九迂）－於淤于迂（衣虛）－朱（專於）－虛（休居）

陽平：除（直如）－如（人餘）－餘（羊劬）－魚（牛劬）－劬（其餘）

上聲：①呂（兩舉）－舉（居許）－巨（＝矩，居許）－許（虛呂）

②主（知雨）－與雨羽（弋落）－落（之雨）－煮（音主）

①＝②（宁：直呂切音柱，柱：尺主切）

去聲：遇御馭（魚據）－據（居御）－樹（商遇）－恕（傷豫）－預＝豫（餘據）

中古音：遇攝三等

聲調相配：「區」丘淤切－「渠」其餘切－「鬪」白許切區上聲／「詎」白許切

渠上聲－「去」丘御切區去聲

現代宜春：須 si³⁴ 居 tey³⁴ 於 y³⁴ 淤 y³⁴ 于 y³⁴ 迂 y³⁴ 朱 tey³⁴ 虛 ey³⁴ / 除 te^{hy}33 如
e³³ 余 y³³ 魚 ny³³ / 呂 ly²¹ 舉 tey²¹ 許 ey²¹ 矩 tey²¹ 主 tey²¹ 與 y²¹³ 雨 y²¹
羽 y²¹ 煮 tey²¹ / 遇 ny²¹³ 御 ny²¹³ 據 tey³³ 樹 te^{hy}213 恕 ey³³ 豫 y²¹³ 預 y²¹³

*-iəu

陰平：①幽攸（烏休）－休（虛攸）－秋（取幽）－鳩（居休）

②收 {職收}

陽平：由尤（易求）－求（渠尤）－流留（力求）－酬（＝醜，持留）

上聲：九（舉友）－友有酉（云九）－久（舉有）

去聲：又幼（云救）－救（居又）－呪（職救）

中古音：流攝三等

聲調相配：「丘」驅休切－「求」渠尤切－「白」去九切求上聲／「糗」去九切

丘上聲－「舊」巨又切求去聲

現代宜春：幽iu³⁴ 休f^hiu³⁴ 秋ts^hiu³⁴ 鳩t^hiu³⁴ 收f^hiu³⁴ / 由iu³³ 尤iu³³ 求t^hiu³³ 流liu³³
留liu³³ 酬t^hiu³³ / 九t^hiu²¹ 友iu²¹ 有iu²¹ 酉iu²¹ 久t^hiu²¹ / 又iu²¹³ 幼
iu²¹³ 救t^hiu³³ 呪t^hiu³³

説明：この例では陰平調の「收」が問題となる。『正字通』が反切を載せないためである。「獸、神呪切收去聲」によって「獸」の平聲と見ることができる。

6. 聲類

古屋（1992）では主に反切系聯法により24の聲類を分析した。その後、林慶勳（2001）はそれを基本的に肯定し、現代宜春方音^{10）}を参照して24聲類の音を次のように再構した：

補 [p] 蒲 [p^h] 莫 [m] 符 [f] 無 [v]
 都 [t] 他 [t^h] 力 [l]
 古 [k] 苦 [k^h] 魚 [ɔ] 呼 [h] 烏 [∅]
 子 [ts] 七 [ts^h] 蘇 [s]
 之 [tɕ] 昌 [tɕ^h] 式 [ɕ] 尼 [n̩] 如 [ʒ]
 側 [tʃ] 初 [tʃ^h] 所 [ʃ]

尼類を [n̩] とした方が良いと思われる点を除いて、筆者も基本的にこの再構に賛成である。このうち「之昌式」三類・「子七蘇」三類と「側初所」三類の間、および「無」類・「烏」類・「魚」類の間には僅かながら混同例が見られる。「之昌式」三類と「側初所」三類は韻母との相配関係のうえで基本的に相補分布を爲すため、本稿ではそれらを合併し、全體に以下のような聲類を再構する（例字の後の小字は中古音の來源）：

*[p] 補波邦幫 [p^h] 蒲婆病滂並 [m] 莫毛民明 [f] 符封非敷奉 [v] 無微
 [t] 都斗丁端 [t^h] 他頭定透定 [l] 力蘭來 [n̩] 尼南女泥
 [k] 古家關舉今見 [k^h] 苦措昆巨技曲溪群 [ɔ] 魚眼言疑
 [h] 呼鞋寒灰許喜曉匣 [∅] 烏矮影以云
 [ts] 子精精 [ts^h] 七自清從 [s] 蘇心洗心邪
 [tʃ] 側鄒之豬招知章莊 [tʃ^h] 初愁昌春超助徹澄昌初禪船 [ʃ] 所式書熟書生禪船崇
 [ʒ] 如日

現代宜春方言の聲母と『正字通』を比べると以下のような違いがある（兩者に關連があると假定した場合）：

『正字通』の「無」類 *v と「魚」類 *ɔ は現代宜春方言の [ø] に對應 (開口字は現在 [ɔ-])。『正字通』にも既に同様の例が見える。たとえば「晚 (微母) : 烏縮切」、「硬 (疑母) : 恩鄧切」、など (「烏恩」は影母)。中古見系聲母は現代宜春方言において、前舌狭母音の前で口蓋音化して [tɕ] [tɕʰ] [ɕ]、[tʃ] [tʃʰ] [ʃ] などの音になっている。現代宜春方言では、「力」類 *l と「尼」類 *n は共に [l] (細音は [ɳ]) に、「呼」類 *h (曉母) 合口字は [f] に、「如」類 *ʒ (日母) はゼロ聲母 (口語音は [ɳ]) に、それぞれ對應する。「側」類 *tʃ、「初」類 *tʃʰ、「所」類 *ʃ のうち中古莊組字は [ts] [tsʰ] [s] に對應¹¹⁾。『正字通』にも同様の混同例が見える。たとえば「組=阻: 壯楚切」、「賊=莊: 側霜切」(組賊: 精母, 阻莊壯側: 莊母)。

7. 韻類

韻母の最大の特徴は臻深梗曾四攝合併と山咸二攝合併である。たとえば、

	『字彙』	『正字通』
臻攝: 隣鱗	離珍切	離呈切
梗曾: 零陵	離呈切	離呈切
深攝: 林臨	犁沈切	離呈切
山攝: 山	師姦切	師姦切
咸攝: 杉	師銜切	師姦切

韻母の再構に当たって最も厄介なのが中古二等韻牙喉音字および山咸攝の問題である。まず二等韻開口牙喉音字に對應する現代宜春方言¹²⁾ はふつう -i 介音を含まない。たとえば街 [kai³⁴] 郊 [kau³⁴] 奸 [kan³⁴] 減 [kan²¹] 等。『正字通』はこれらの字に對し、時に -i 介音を含むかに見える反切を、時に -i 介音を含まないかに見える反切をつけている。たとえば、

街: 居鯁切 (「鯁」は「桑猜切」、一等哈韻)	*kai? kiai?
郊: 居宵切 (三等「嬌驕」などと同音)	*kiaiu?
奸: 經天切 (四等「堅兼」などと同音)	*kian?
減: 九輦切 (三等「檢蹇」などと同音)	*kian?

讀書音としては -i 介音を持つ音節として再構したほうが良い場合が多そうである。

次に現代贛語ではふつう山攝合口一等と二等の間に區別がある。たとえば現代宜春方言の牙喉音・唇音の場合：

合口一等字：[kuon³⁴]（官）、[pon³⁴]（般）

合口二等字：[kuan³⁴]（關）、[pan³⁴]（班）

これらに對し『正字通』はしばしば同じ反切をつけている：

官關：沾歡切

般班：補彎切

山咸攝の一等と二等を區別しない傾向は白鹿書院本『正字通』の反切の場合、特に顯著である¹³⁾。

このほか客家・贛・粵（一部の吳語も）などの方言に共通する現象ながら、現代宜春方言では山咸攝一等開口の舌齒音と牙喉音の間に區別がある。たとえば：

山攝開口舌齒音：壇 [t^han³³] 牙喉音：寒 [hon³³]

咸攝開口舌齒音：談潭 [t^han³³] 牙喉音：含 [hon³³]

次のように『正字通』の反切からは、これらに對應する區別を伺うことはできない：

壇潭：徒寒切

寒含：河南切（南：咸攝一等舌齒音）

山攝合口一等・二等の場合と同様、讀書音としては區別がないと見るべきであろう。

次に合口三四等は時に開口三四等と混同の傾向を見せるが、完全な混同とまでは言えないと思われる。

「掾」柱戀切音掾＝「瑑」柱見切音篆（「戀」龍眷切、合口？；「見」居宴切、開口？）

このほか現代宜春方言の蟹攝字は、しばしば [-oi] と [-ai] の區別を見せる。[-oi] の主な來源は蟹攝一等の哈韻開口舌齒音牙喉音と泰韻開口牙喉音である。[-ai] の主な來源は蟹攝二等開口と一等泰韻開口舌齒音である。このような區別は反切系聯法からは伺うことができない。山咸攝の場合と同様、讀書音としては區別がないと見るべきであろう。

效攝一等・二等牙喉音および宕攝一等・江攝二等の場合は現代宜春方言で多

く同音である。

效攝一等 高 [kau³⁴] 考 [k^hau²¹]

效攝二等 郊 [kau³⁴] 巧 [k^hau²¹]

宕攝一等 岡 [koŋ³⁴]

江攝二等 江 [koŋ³⁴]

『正字通』では直拗の區別があるようである。

高：孤操切 *kau

郊：居宵切 (三四等「驕澆」と同音) *kiau

岡：居康切 *koŋ

江：居章切 (三等「僵」と同音) *kiŋ

江攝二等字の中には稀に直音に見えるものがある。たとえば「椽、呼郎切學平聲」(一等「杭」と同音、『字彙』は「下江切學平聲」)など。「項、許亮切香去聲」(項：江攝二等、亮香：宕攝三等)の注に「俗讀杭上聲」と言うところから見て、江攝二等字を直音で讀むのは俗音すなわち口語音だと思われる¹⁴⁾。

以下に『正字通』反切の韻母の再構を擧げる。韻類は反切系聯法により歸納されたもの、音價は主に現代宜春方言および中古音との對應を根據にして、ある程度、音韻論的解釋を施したもの。

- * [a] 把 [ia] 野借 [ua] 瓜誇 [o] 多左禾果
- [ɿ] 字 [i] 詩寄衣 [u] 姑夫租助 [iu] 豬
- [ai] 改孩街鞋 [uai] 乖 [ui] 規杯危
- [au] 保早 [iau] 標焦 [əu] 走狗 [iəu] 周九酒
- [an] 班參般 [aʔ] 發襪甲 [ian] 天千 [iaʔ] 節 [uan] 官關慣貫端
- [uaʔ] 刮 ([oʔ] 鉢割 [uoʔ] 活) [iuan] 專勸元 [iuaʔ] 缺血雪月越
- [əŋ] 燈跟 [əʔ] 北黑 [in] 津音金 [iʔ] 日集直
- [un] 分門昏滾坤敦村 [uʔ] 突骨 [iun] 春準 [iuʔ] 出
- [oŋ] 幫壯 [oʔ] 剥託 [ioŋ] 將祥 [ioʔ] 掠削 [uoŋ] 光廣 [uoʔ] 郭
- [uəŋ] 紅工孔宋濃 [uəʔ] 族促 [iəŋ] 窮 [iəʔ] 伏祝綠玉

以上のうち一部の入聲韻の再構には問題があるかもしれない。なぜなら *aʔ

(發襪甲)、*ua? (刮)、*u? (突骨)などは、現代宜春方言では [ai?], [uai?], [ui?] のような形で現れるからである。しかし、Forke1903 に描かれた百年前の袁州方言(すなわち宜春方言)ではこれらの韻尾に -iが見えない。

	Forke	現代(陳1991)
瞎	ha	hai?
合	ho	hoi?
刷	so?	soi?

Forkeの音(合 ho)は『正字通』の「合、呵入聲」(「呵」は ho と再構される)という音注と一致する。山咸攝入聲の「瞎」「刷」を *a? や *o? と再構すると現代宜春方言の梗攝入聲の口語音 [-a?] (Forkeの資料には見えない)や宕攝入聲 [-o?] と衝突してしまうが、今は暫らく Forke と同様の音で再構しておくことにする。

現代宜春方言の韻母と『正字通』とを比べると、上述の中古二等韻牙喉音字や山攝合口一等と二等の區別などの問題のほか、主に以下のような違いがあるが、両者の間に繼承関係があると假定した場合、ほぼすべて聲母との関連で説明がつくものである：

『正字通』の *i iu in i? は現代宜春方言の [i iu in i?] ([tʃ tʃʰ ʃ] の後) と [i iu in i?] (その他の聲母の後) に對應。*ui は [ui] ([k kʰ ʃ] の後)、[i] (唇音聲母および [ts tsʰ s] の後)、[y] (その他の聲母の後) に對應。*un は [ən] ([f] の後)、[uin] ([k kʰ ʃ] の後)、[ɪn] ([p pʰ m] の後)、[un] (その他の聲母の後) に對應。*iau は [əu] ([tʃ tʃʰ ʃ] の後) と [iəu] (その他の聲母の後) に、*iuan は [ən] ([tʃ tʃʰ ʃ] の後) と [iən] (その他の聲母の後) に對應。*u は遇攝一等精組(租など)と三等莊組(楚など)の場合 [ɪ] に對應(止攝開口三等精組・莊組と同音)。*uə? は通攝一三等精組(簇族蹙促など)の場合 [ɪ?] に對應。*uəŋ は [uəŋ] ([k kʰ ʃ] の後) と [əŋ] (その他の聲母の後) に對應。

*o が [o] (个可など) と [uo] (過顆など) に對應するのは説明がつかない。

8. 調類

陳昌儀1991によれば現代宜春方言の聲調は以下のとおりである：

陰平 34 上聲 21 去聲 213 入聲 5 (-?)

陽平 33

『正字通』と異なるのは、現代宜春方言の陽平が中古去聲の全清・次清聲母字を含むことである¹⁵⁾。『正字通』では中古去聲字は、官話と同じく、全清・次清か全濁かに拘わらず一つの聲調(去聲)としてまとまっている。上述のとおり中古平聲字は反切下字により聲調の陰陽が示される。中古上聲全濁字は基本的に去聲に入り、次清字と合併しているが、一部の全濁字は次清字と合併しつつも上聲に留まっている¹⁶⁾。中古入聲字は全清・次清か全濁かに拘わらず一つにまとまっている。臻深梗曾四攝合併、山咸二攝合併という事実および「諾、那入聲」のような直音注、更に現代贛語に基づけば、入聲は聲門閉鎖音を伴っていたと推定するのが最も自然である。現代宜春方言の陽平が中古去聲の全清・次清聲母字を含む點は『正字通』と大きく異なるが、現代宜春方言の内部差異の問題もあろう。

以上より、張自烈の讀書音として、次のような五つの聲調が歸納される：

陰平：「蒿薺」呼刀切、「枵驍」虛交切、「方芳」敷荒切

(中古：平聲全清・次清)

陽平：「豪毫」呼陶切、「淆爻」虛勞切、「防房」敷亡切(中古：平聲全濁)

上聲：「吐杜」他魯切、「起技」區里切(中古：上聲全清・次清、全濁_{一部})

去聲：「化話」呼霸切、「替地」他計切、「憩技」奇寄切、「糙造」七到切、

「臭宙」尺救切(中古：去聲全清・次清・全濁、上聲全濁_{大部分})

入聲：「脫奪」他括切、「發罰」房押切、「設舌」式列切

(中古：入聲全清・次清・全濁)

9. おわりに

『正字通』の音注が反映する音韻體系に口語音を見出すことは難しい。たとえば聲母の面では日母が泥母と同音に讀まれる例や微母が明母と同音に讀まれる例は見られず、韻母の面でも梗攝字が廣母音で讀まれる例は見られない(現代宜春方言では、例えば「平」の口語音は [p^hiaŋ³³]、文語音は [p^hin³³] である。

『正字通』の「平」は臻攝「貧」と同音、現代の [p^hin³³] と対応)。他の 16～17 世紀の韻書・韻圖の場合も同様である。たとえば 16 世紀の崑山吳方音を反映する『聲韻會通』（丁鋒 2001）、17 世紀の安徽吳方音を反映する『音韻正訛』（古屋 1998）、17 世紀の江西客家方音を反映する魏際瑞『翻竊』（古屋 1997）、17 世紀の閩南方音を反映する廖綸璣『拍掌知音』（古屋 1994a、廖綸璣は廖文英の子）など、みな口語音を収録しないようである。この事實は、これらの資料に描かれた音系が當時の知識人の讀書音であることを物語る。『正字通』の讀書音體系も、全濁聲母と次清聲母が平仄に拘わらず合流していることを除けば、『西儒耳目資』などに見える明代の官話とかなり近いものと言える。次のように全濁聲母の筭の字を官話と同じく全清聲母の音に讀んでいるものも僅かながら見える：

洞、都弄切東去聲（『字彙』：徒弄切同去聲、「都東」は全清端母、「洞徒同」は全濁定母）

罷、必駕切音杷（『字彙』：皮駕切音杷、「必」は全清幫母、「罷皮杷」は全濁並母）¹⁷⁾

今後の課題は、讀書音の研究が方言音韻史研究にとってどのような役割を果たしうるか、讀書音と各方言の口語音系はいかなる関係を持つのか、讀書音と各方言の文語音はいかなる関係を持つのか、などの問題について考察を深めることであろう。

参考文献

- 陳昌儀 1991 『贛方言概要』、江西教育出版社
- Forke, Von A. 1903. Über einige südchinesische Dialekte und ihr Verhältniss zum Pekinesischen. *Mittheilungen des Seminars für Orientalische Sprachen zu Berlin.*
- 古屋昭弘 1992 『正字通』和十七世紀的贛方音、『中國語文』4、北京商務印書館
- 1994a 『拍掌知音』的成書過程、『中國語文』6、北京商務印書館
- 1994b 張自烈年譜稿（明代篇）、早稻田大學大學院文學研究科紀要 39
- 1995 『正字通』版本及作者考、『中國語文』4、北京商務印書館
- 1996 張自烈年譜稿（遺民篇）、早稻田大學大學院文學研究科紀要 40 第 2 分冊
- 1997 魏際瑞と 17 世紀の江西客家方音、『橋本萬太郎紀念中國語學論集』、内山

書店

———— 1998 『字彙』與明代吳方音、『語言學論叢』20、北京商務印書館

———— 2002 正字通反切的語音系統、李方桂記念漢語史研討會宣讀論文、ワシントン
大學

———— 2004 白鹿書院本『正字通』最初期の音注、『中國文學研究』29、早稲田大學

河野六郎 1979 吳方言における咸攝一等重韻の扱い方について、『東洋研究』53、大東文
化大學

李如龍・張雙慶 1992 『客贛方言調查報告』、廈門大學出版社

林慶勳 2001 正字通的聲母、『聲韻論叢』11

林慶勳 2003 『正字通的音節表』、行政院國家科學委員會補助專題研究計畫成果

魏鋼強 1990 『萍鄉方言志』、語文出版社

注

- 1) 東京大學藏白鹿書院本『正字通』以降は音注の面における版本間での違いはほぼなくなる。
- 2) 『洪武正韻』は家藏の明刊本、『字彙』は上海辭書出版社影印(1991)の康熙二十七年刊本による。
- 3) 反切歸字と異なり、「欣」は臻攝、「戈」は合口字。
- 4) ㊸の場合、「而」が日母の音を表すのに不適當となっていた可能性がある。臻深梗曾四攝合併に關連することもあろう。たとえば『正字通』で「人」と同音になる「任」と、「軫」と同音になる「枕」はそれぞれ『字彙』で「如深切」「章錦切」であり、『正字通』の「如神切」「章引切」はそれに由來するかもしれない。
- 5) 『正字通』では明らかに平聲が陰陽に分化している(全濁從母と次清清母も合流)。
- 6) 全濁澄母と次清昌母が平仄(長は平聲、杖は上聲)に拘わらず合流。
- 7) *印をつけたこれらの音聲記號は『正字通』讀書音の再構音(暫定的なもの)。
- 8) 次の例では『字彙』の音注と同じなので採用しない:「窳」知滑切搥入聲(搥入聲)、「矚」無發切瓦入聲(瓦入聲)、「髻」枯架切恰去聲(恰去聲)、「訶」苦雅切恰上聲(恰上聲)。次は又音の例:「斡」又烏活切窩入聲(腕入聲)。なお「打」丁雅切達上聲では『正字通』の聲母と一致しない(「打」ta、「達」tʰaʔ)。
- 9) 今回、内閣文庫藏白鹿書院本『正字通』の反切に基づき、反切系聯表および同音字表を作成したが、紙幅の關係上、ここに挙げたもの他は省略に従う。
- 10) 陳昌儀 1992 によれば現代宜春方言の聲母は次のとおり:

[p] 波邦 [pʰ] 婆病 [m] 毛民 [f] 封灰

[t] 斗丁 [tʰ] 頭定 [l] 南蘭

[k] 家關 [kʰ] 揩昆 [ŋ] 矮眼 [h] 鞋寒 [∅] 烏無

[ts] 鄒精 [tsʰ] 愁自 [s] 心洗

[tɕ] 猪舉 [tɕʰ] 春巨 [ɕ] 許書 [ɲ] 女言

[tʃ] 招今 [tʃʰ] 超曲 [ʃ] 喜熟

11) 結合する韻母を条件とする。

12) 陳昌儀 1991 によれば現代宜春方言の韻母は以下のとおり（下線は口語音のみに現れる韻）:

[a] 把花 [ia] 野借 [ua] 瓜誇 [o] 多左 [uo] 禾果 [i] 租助字 [i] 衣杯 [i] 詩寄
[u] 姑夫 [y] 猪水

[ɛ] 去鋸 [iɛ] 爹擠 [uɛ] □ [ə] 二耳

[ai] 街鞋 [uai] 乖塊 [ui] 規危 [oi] 改孩

[au] 保早 [iaʊ] 標焦 [əʊ] 走狗 [iu] 揪酒 [iu] 周九

[an] 班三 [uan] 關慣 [ən] 分昏 [in] 津音 [im] 門金 [un] 敦村 [yn] 春準

[uin] 滾坤 [əʊn] 專勸 [iəʊn] 元軟

[on] 般端 [uon] 官貫 [ɛn] 燈跟 [iɛn] 天千 [uɛn] □

[oŋ] 幫壯 [ioŋ] 將祥 [uoŋ] 光廣 [aŋ] 坑輕 [iaŋ] 聽晴 [uaŋ] 橫梗 [əŋ] 紅窮
[iəŋ] 宋濃 [uəŋ] 工孔

[ɾʔ] 族促 [iʔ] 日集 [ɾʔ] 執直 [uʔ] 伏祝 [yʔ] 出突 [aʔ] 白客 [iaʔ] 壁錫

[oʔ] 剝託 [ioʔ] 掠削 [uoʔ] 握渥

[ɛʔ] 北黑 [iɛʔ] 節雪 [uɛʔ] 國 [əʔ] 缺血 [iəʔ] 月越 [aiʔ] 發甲 [uaiʔ] 刮襪

[oiʔ] 鉢割 [uoiʔ] 活 [iuʔ] 綠玉

[uiʔ] 卒骨 [m] □ [ŋ] 五

13) 古屋 2004。なお咸攝一等「合」の「侯閣切呵入聲」（合 *hoʔ、呵 *ho）の注によれば、咸攝入聲では一等 *-oʔ と二等 *-aʔ の區別があるように見えるが、『正字通』での「合」はむしろ宕攝入聲相當の音になっていると推定される。ただし現代宜春方言では「合」は「hoiʔ」である（山咸攝的）。後述 Forke の記述参照。

14) たとえば『正字通』「幸」において「俗讀去聲如恨」と言うが、現代宜春では「恨」と同音の「幸」[hən²¹³] の音は正に口語音である。

15) 中古去聲の全清次清聲母字の中には現代宜春の去聲 213 に入るものも存在する。「鎮振震／惡藹要幼厭怨／配翠態炮套透嘆判纂申聘慶困暢曠銃／勢粹付傳赴賦婿舍卸好漱少獸漢喚獻遜聖興況」など。魏 1990 によれば、宜春の隣の萍郷には『正字通』と同じ聲調體系を持つ地点がある。ただし、中古去聲全清次清全濁聲母すべてが一つの去聲に含まれるという点のみに着目するならば明末清初の官話でも同様である。

16) この問題については拙稿『『正字通』における中古全濁上聲の扱いについて』（近刊）で論じた。

17) 直音注の中では「杷、蒲麻切罷平聲」「動、杜弄切音洞」のように『正字通』本来の音で現れる。ただし「杷、罷平聲」は『字彙』と同じ。